

あわゆず ぶれす

第28号 2013年10月30日発行

伝えよう日本語を
広げよう徳島から



J T M と く し ま
日 本 語 ネットワーク

外から見てみるということ

昨年から今年にかけて、今の日本語教育の動きや、県外の他団体の事例を直接聞く機会が何度かありました。それは、文化庁地域日本語教育コーディネーター研修およびフォローアップ研修の受講、そしてフォローアップ研修の母体でもある文化庁日本語教育大会に参加したときのことで。

日ごろ、日本語教育に関する情報というのは、身近で一緒に活動している支援者のみなさん、または、やりとりのある関係団体、関係部局から得られるものが主です。同じ県内でも、あまり交流のない他の団体の取組を知る機会はもちろん、個人で日本語指導に携わっていらっしゃる支援者や先生方と意見交換ができる機会はあまりありません。さらに言えば、JTMは日本語支援を目的とした団体としては県内では大きい団体であると自負していますが、そうすると、どうしても情報を得る機会よりも発信する機会が多く、私たちが持ち得る情報に偏りがあることは否めません。

そんな中、全国から集まった他団体のいろいろな事例を見聞きできたことは、とても刺激的なことでした。外国人集住地域には集住地域の課題が、散在地域には徳島とよく似た散在地域の課題がありました。また散在地域ながらも近年外国人居住者が急速に増えている地域では、支援者の養成に課題を抱えていました。団体の取組にも、思いもよらないさまざまな取組がありました。そこから今の日本語教育を象徴するものとして「Can-do」「対話」「振り返り」「外国人自身の社会貢献」「SNS」という5つのキーワードが私の中で浮かび上がってきました。中でも最も興味を引いたのは「対話」による教室の取組です。今まで私が携わったことがある教室は、「文法積み上げ」を中心とした教室か、学習者と支援者が思いのままにおしゃべりをするサロン形式のものが主でしたが、この「対話型教室」はそのどちらとも異なっていました。学習者主体でありながら、学習者の興味関心を引く効果的なトピックが計画的に設定され、学習者のレベルに応じた表現を支援者が柔軟に取り入れることによって、一過性のおしゃべりではなく、習得したことが学習者にも残っていくというものです。5つのキーワードを強く意識したこと、そして「対話」の効果を知ったことで、私は日ごろの活動を根本から見直す必要性を強く感じました。

2012年5月に発行した第25号『あわゆずぶれす』の巻頭で、私は「同じ目的があればこそ、メンバー達は、最善の方法を模索しながら、ともに歩んでくることができた」と書きました。その思いは今も変わりません。けれども、会の中で協議を重ねて一つの着地点を見出した時、それで安住してしまうのではなく、クリティカルな視点を持つことも大事だと思うようになりました。そのためには、常にアンテナを張っておくこと、内外問わずいろいろな情報を得る意志を持つこと、そして新しい情報を拒絶せずに一度受け止めてみるのが大切です。

このたび、県外の団体と交流しさまざまな取組を知ることによって、日ごろの活動を外から客観的に見られる機会に恵まれました。しかしながら、ここ徳島でそうした機会を持つことはまだ実現していません。県内にも私たちが知らないすばらしい取組をされているところがたくさんあるはずです。JTMの取組にも他団体の方に参考にしていただけるものがあるはずです。いつの日か、この徳島でも、日本語教育に携わっている団体、支援者が垣根なく交流し、徳島の日本語教育を共に考える機会が持てる日が来ることを期待してやみません。

(辻 暁子)

文化庁委託

「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

日本語指導者養成セミナー

第1回、第2回

日時 平成25年8月24日(土) 9:00~16:00

講師 岩見 宮子 先生

(公益社団法人国際日本語普及協会理事)

第1回「生活者としての外国人」のための日本語教育がめざすもの

9:00~12:00

岩見先生の講義は日本に住んでいる外国人、つまり「生活者としての外国人」は言葉の壁・制度の壁・偏見などによって多くの困難を抱えているというお話から始まりました。続いて今日の講座の概要についての説明があり、自己紹介を兼ねて、地域における日本語教育の課題について意見を出し合いました。先生の質問は「皆さんの接するあるいはイメージする外国人はどんな人で、その外国人にとっての課題は何ですか。」「皆さんの地域における日本語教育の課題は何ですか。その課題が生じた理由・背景は何ですか。」などでした。参加者から「外国人と深い話ができない。」「外国人にとって日本語学習の機会が少ない。」「来日直後から日本語学習の機会があればいい。」「あることについて『アフリカの人はどうですか。』と聞いたら、むっとされた。『あなたの国は〜?』と聞いたほうが良かったのではないか。」「新たに教室を始めたが、参加者が少ないし、来ても継続しない。」などの意見が出ました。

国内における日本語教育の現状と人口減少化時代

外国人登録者はこの20年間、増えている。しかし、日本語教師は少なく、ボランティアの支えなしには外国人への日本語教育は成り立たない状況にある。更に、日本は人口減少化時代に入り、生産年齢人口が減ってきている。このことを補う解決策の一つとして、外国人の定着を図り、働いてもらうことが考えられる。国の外国人政策として、多文化共生社会へ向けて、少しずつ改革が行われている。多様性を認めれば活力ある社会となる。



日本語教育のパラダイムシフト

今、日本語教育の現場で大きな変化が起こっている。日本語教育のパラダイムシフトである。文型積み上げ方式から、コミュニケーション重視へ、教師主導型から学習者主体へ、知識埋め込み型から、相互行為型、実践共同体への社会参加などである。このことは、教師はコーディネーターあるいはファシリテーターであるという教師の役割の変化であり、外国の人たちは他者とともに地域・社会に参加することによって言葉を習得することができるという考え方への変化である。これらのことが、文化庁事業の「『生活者としての外国人』に対する日本語教育」の指導方法の考え方の背景にある。

「生活者としての外国人」のための日本語教育がめざすもの

めざすものは多文化共生社会の基盤づくりである。具体的には①人とつながること②社会の一員として自立的に社会に参画すること③自分らしさや力を発揮する（エンパワメント）ことである。

文化審議会国語分科会の成果物

「生活者としての外国人」に対する日本語教育の「標準的なカリキュラム案」、「活用のためのガイドブック」、「教材例集」、「日本語能力評価」、「指導力評価」がある。

第2回「生活者としての外国人」のための日本語教育の実践**13:00~16:00**

午後は実際に指導する時のために、指導方法のポイントを話していただき、現在先生が関わっていらっしゃる2カ所の活動を紹介していただきました。その後、各グループでカリキュラム案を参考にしてプログラムを作り、発表しました。

指導法について考える

(1) 指導方法のポイント

- ①地域・学習者に応じた教育内容を選択し、工夫してプログラムを作る。
- ②学習者の生活場面と密着した行動・体験中心の活動を通して、社会の一員として自立した生活ができることを目指す。
- ③専門家・地域住民などの参加・協力を得る。
- ④互いの社会や文化の理解が深まるような対話中心の活動を盛り込む。

(2) 対話促進のために効果的なことは何か

質問、確認、相づち、積極的応答などをして、学習者の話をよく聞き、自分の意見や自分自身のことを率直に言う。その中からお互いの信頼感のもと、問題の気づきと問題解決への道が見える。

活動紹介

(1) 東京都内の「『生活者としての外国人』に対する日本語教室」

目標：互いの文化の理解を深め、コミュニケーション能力の向上を目指す。

参加者：外国人主婦

(2) 難民のための日本語教育（RHQ支援センター）

目標：日本社会で自立した生活を送るために必要な日本語を学ぶ。

参加者：ミャンマー人など

実践

「標準的なカリキュラム案で扱う生活上の行為の事例」の一覧表を基にしてプログラム案、活動案をグループ別に作るという実際の活動に移りました。「対象・課題・テーマ」を決め、それぞれのグループで相談しながら、まずプログラム案を作り、その後で活動案を作り発表しました。対象者は来日直後の主婦で、日本語はあいさつができる程度という場面設定が多かったです。その主婦が買い物をする、体調が悪くなり、どうしたらよいか隣人に聞くなどです。ひとつのコースとして全体の回数やテーマを考えるとところまではいかず、ひとつの活動についての発表がほとんどでした。アンケートを見ると、初めての経験で難しかったけど、いろいろな人の意見が聞けてよかった、活動案作成が一番印象に残っているなどの意見がたくさんあり、経験者にとっても未経験者にとっても興味のある活動になりました。

(村松 幸子)

〈受講者アンケートより〉

- ・今までは文法積み上げ式のほうが学習者に変な癖が付かず、有効だと思っていたが、必ずしもそうではないということが分かってよかった。
- ・今まで活動案をいろいろ作ってきたが、きょうのお話を聞いてかなり大雑把な作り方だったことが分かった。
- ・日本語教育の進化や歴史がよく分かったが、初心者なのでイメージが湧きにくいところもあった。
- ・対話型授業の柔軟性を聞いて、レベル差をあまり気にしなくてもいい授業のヒントがあった。
- ・今まで漠然としていた「生活者としての外国人」の捉え方がよく分かった。
- ・初めて活動案や模擬授業の内容を考えたことがいちばん印象に残っている。
- ・国の外国人政策の方向性がよく理解できた。

講師プロフィール**岩見 宮子先生 公益社団法人国際日本語普及協会理事**

1970年からビジネス関係者、インドシナ難民、留学生、研修生に対する日本語授業及び教師養成講座の講師を担当する。ベトナム、イランにて大学生に対する日本語教育担当。中国語学院日本語教師訓練班（大平学校）にて文法を担当。大和定住促進センター、国際救援センターにおけるインドシナ難民への日本語教育主任教師を務める。

1995年から(社)国際日本語普及協会専務理事として、内外の日本語教師研修の企画、調整のほか講師を担当。2001年から2004年の文化庁委嘱コーディネーター研修の企画、コーディネーター、講師を務める。2007年から2012年文化審議会国語分科会日本語小委員会委員、第12期文化審議会委員。

文化庁委託

「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

日本語指導者養成セミナー

第3回、第4回

日時 平成25年9月7日(土) 9:00~16:00

講師 嶋田 和子 先生

(一般社団法人アクラス日本語教育研究所代表理事)

第3回「学習者の発話を引き出す教室活動をめざそう！」

9:00~12:00

第4回「教材をいかす力を養おう！～『できる日本語』を使って～」

13:00~16:00

第3回、第4回では、講師の嶋田和子先生より、著書の『できる日本語』シリーズを題材に、支援者も学習者もワクワクする授業にするための考え方や具体的な授業の事例をたくさんお聞きしました。発話を引き出す授業とは、教材をいかす力とは何でしょうか。いくつかのキーワードをもとにその一部をご紹介します。

教えない

支援者は「教えない」。冒頭で嶋田先生から発せられた言葉です。「えっ？じゃあ、私たちは何をすればいいの？」そう思った受講者の方も多かったのではないのでしょうか。6時間のセミナーの中で、その答えが次々と解き明かされていきました。



受講者と同じ高さを目線を下げたお話をされる嶋田先生(中央左)

場面

「あそこに佐藤さんがいます。」日本語を教えたことがある人なら、誰でも「ああ、あれ」とピンとくる文型。そうです。日本で最も多くの人に使われている初級テキストの10課で

最初に出てくる、「N(場所)にN(人)がいます」という文型です。みなさんはどのように導入していますか。どのような場面を学習者にイメージさせますか。最初のグループワークはこの文型をどんな場面で使うか考えるということでした。しかし、なかなかびたりとあてはまる場面が出てきません。そして出てきた中から比較のおさまりがよいと感じたもののひとつが、パーティで知り合いを見つけたときに「あっ！あそこに佐藤さんがいます。」という例でした。ただし、元の文型に「あっ！」という驚きの言葉が加わっています。このように場面が明確にイメージできて、「あっ！」という発見の言葉を伴って初めて文型に息が吹き込まれ、学習者が「できる」環境が整うのです。つまり場面と状況が適切にイメージされない授業では、いつまでたっても学習者は「できる」ようにはなりません。そしてさらに、自分の考えを伝えられるようになるためには、初級の段階から、ある程度の固まりで話すことも大切です。これらのことは、今までの文型・文法積み上げ中心になりがちだった指導方法を見直す大きな気づきとなりました。

対話

嶋田先生によると、「対話」とは「異なる価値観を持った人同士が、話し合いを通して、自己理解、他者理解を深め、新たな価値観をつくりだすこと」だそうです。『できる日本語』シリーズにはその対話を促すさまざまな仕掛けが散りばめられています。副教材の『わたしのことばノート』を使ったワークでは、グループで、いくつかの形容詞をプラスのイ

メージ、マイナスのイメージ、ニュートラルなイメージに、話し合いながら分けてみました。全員同じように分けたものもあれば受け止め方が違うものもありました。「複雑」をマイナスのイメージで捉えた人もいれば、パズルは複雑なほうが面白いというプラスのイメージで捉えた人もいたのです。このように違いを話し合うことで対話が生まれます。どんな活動も工夫次第で「対話」につなげられると気づいたワークでした。

スパイラル

次の2つの自己紹介を比べてみてください。

- ①「私は〇〇です。ネパールから来ました。趣味はサッカーです。どうぞよろしくお願いいたします。」②「私は〇〇と申します。3か月前にネパールのカトマンズから参りました。今、日本語学校で勉強しています。趣味はサッカーをすることと見ることです。どうぞよろしくお願いいたします。」
 どうですか。この2つは同じ学習者による自己紹介です。
 ①は『できる日本語初級』1課を、②は3か月後に『できる日本語中級』1課を学習したあとの自己紹介だそうです。

このように同じ「出会い」の場面でもスパイラル（螺旋状）に同じトピックを繰り返しながら上がっていく「スパイラル方式」で学習し、習得することにより、学習者は自分が上達したことが実感でき、それが次のモチベーションにつながると思います。

人とつながる

嶋田先生は、学習者が教室の外とつながること、人とつながることをとても大切に考えていらっしゃいました。そして、それは教材にも生かされていました。たとえば読解教材の『たのしい読みもの』には日本の暮らしに根ざしたものや、「日本文化トリビア」とも言える楽しいトピックがたくさんあります。学習者はそうした読み物に触れ、考えを深めることで、もっとまわりの人に聞いてみたい、身近な人にも教えてあげたい、そんな思いが深まるそうです。

みなさんも、ぜひ学習者とともにワクワクしながら、教室を「教える場所」ではなく、「学習者が話したくなる場所」、そして「人とつながりたくなる場所」にしてみませんか。

(辻 暁子)

〈受講者アンケートより〉

- ・単なるパターンプラクティスになりがちな教室活動を生き生きと楽しいものにできるアイデアをいただきました。
- ・「書ける」「読める」「見てわかる」という目的に分けて漢字リストがあることに、「そうか!」と気づかされました。
- ・初級の段階で、支援者はできるだけしゃべらず、学習者から言わせるやりかたに驚きました。
- ・学習者の学びたいという気持ちを引き出すことが大切。教室を外とつなぐことが大切。
- ・先生を見習って、現状に満足しないで、自分で教材を発展させていきたいです。
- ・表情豊かにテンポよく受講者の言葉を引き出されていく様子に感心しました。
- ・自分もコミュニケーション力を上げなければと思った。
- ・漢字に対話を取り入れられる方法を知った。
- ・24時間講義を聞きたかったです。
- ・共に学ぶことの重要性（を知った）。
- ・フィードバックすることは大切。
- ・目からウロコ。
- ・傾聴が大切。



(漢字についてのワークで。WBに書かれているのは、「買い物」をテーマに、各グループから出された漢字)

講師プロフィール



嶋田 和子先生 一般社団法人 アクラス日本語教育研究所 代表理事

1969年、津田塾大学英文科卒業（2006年、放送大学大学院文化科学研究科修士課程修了）。大学卒業後外資系銀行に勤務。その後専業主婦を経て日本語教師となる。幾つかの日本語学校に非常勤講師として勤務した後、1990年より学校法人国際青年交流学園イーストウエスト日本語学校に勤務。教務主任、副校長として教師の指導、学生の日本語指導・進学指導に当たり、2012年3月に退職。退職と同時に2012年3月、一般社団法人アクラス日本語教育研究所を設立し、代表理事となる。現在、清泉女子大学非常勤講師など、大学、教師養成講座、地域日本語教育関連の事業などさまざまな形で日本語教育に携わる。また、学習者の運用能力向上をめざし、8年近くかけて練り上げてきた日本語教科書『できる日本語 初級』を2011年4月に出版。以後、『できる日本語』の考え方（プロフィクション重視の日本語教育）を教育現場に広めることに努めている。（2013年9月現在、シリーズは12冊となる）。

徳島県教育委員会主催

「帰国及び外国人児童生徒等に対する日本指導研修」の講師として参加して

玉置 房



酷暑の夏が本格的に始まった7月31日、板野町にある徳島県立総合教育センターで、徳島県教育委員会主催の教員のための「帰国及び外国人児童生徒等に対する日本指導研修」に講師の一人として参加し、午後からの講義を担当した。

「外国にルーツ持つ子どもたちを支援して～学校現場での日本語指導～」

1. 外国語としての日本語
 - ・日本語の構造を理解し、母語とかけ離れた言語で教科学習する過酷さを知ってもらう。
2. デモンストレーション（アフリカ人語力がゼロレベルの子どもへの初日のアフリカ人語の授業）
 - ・受講者は、南アフリカに転校した3年生の日本人の男の子で、アフリカ人語の初日の授業を受けるという設定で受講者に授業のデモをした。日本に来たときに子ども達を感じるであろう、言葉が分からない不安や全く知らない外国語を初めて覚える大変さをほんの少しだが体験してもらった。
3. 日常会話はできるのに学年相当の学力が身につかない児童生徒
 - ・生活言語と学習言語の違いを説明し、学習言語は習得に時間がかかり個人差も大きいことを話した。
4. 日常会話と教科書の文章
 - ・中学2年生が店で買い物している会話文と中学2年の理科の教科書の文を比較した。
5. 学習言語が難しい理由
 - ・非言語情報がなく抽象的で専門用語が多い。書き言葉で複文や重文が多くフィードバックができない。
6. 外国にルーツを持つある中学生の実例を紹介
 - ・指導した子どもが、教科書の文章で分からなかった語彙、文脈に合った理解ができなかった語彙を黒塗りにして読んでもらい、その文章がどのくらい理解できるか体験してもらった。
7. 学校での教科学習の難しさ
 - ・読解が困難な要因として、学習言語習得が難しいことや代名詞の省略が多いことがあげられる。
 - ・学習言語は、教科に特化した専門的な語彙と教科全般で使われている非日常的な語彙の2種類がある。
8. 理解度を上げるためにしたこと
 - ・教科書の文章にルビを振る、やさしい日本語に直す（リライト）ということをした。
 - ・教科学習の要である漢字学習は、覚える部首を24に限定し弁別力を養い漢字学習を促進した。
 - ・漢字学習を楽しくするために教材を自作したり、既製のものを精査したりして使用した。
9. 読解には学習や経験の積み重ねから得られる背景知識が重要
 - ・外国にルーツを持つ子どもたちが、日本文化の背景知識を要する文章の理解にはハンデがある。
 - ・読書での疑似体験を通して背景知識を増やすために取り組んだこととして、昨年度支援した子どもたちの中で、多読を体験した子どもたちの声と多読専用の本を紹介した。

「web サイト『徳島県 外国にルーツを持つ学習の手引き』について」



JTMで制作した学校の先生のためのWEBサイト「徳島県外国にルーツを持つ学習の手引き」を徳島県教育委員会の田村先生が説明し、私は田村先生の質問に答えたり、補足説明したりするという形で、参加者に実際にパソコンを操作してもらった。

その後、何人かの先生からの質問に答えて終了した。終わってからは、持参した教材やWEBで紹介した本を手取る方が多く、少しは先生方のお役に立てたのかなと安心した。

準備に当たり、この3年間、学校で子どもたちにしてきたことを振り返る良い機会となった。異文化、異言語の中で大きくハンデを背負って学校生活をスタートした外国にルーツを持つ子どもたちの中には、何年経っても教科学習が追いつかず、努力を諦めている子どもたちもいた。講義を終えて、改めて熱心に聴いてくださった先生方を目の当たりにし、この先生方と一緒に何とかして全ての子どもたちが夢を持てるよう個々の子どもに寄り添った細やかな日本語指導をしていきたいと強く思った。

サマースクール

「夏休み子どもにほんご教室」

日時 2013年7月23日～8月3日までの8日間
10:30～12:00

参加者 小学生14名 中学生6名 高校生1名 計21名
スタッフ24名

今年も県の委託を受け「夏休み子どもにほんご教室」を開催しました。長い夏休み期間のなかで、この8日間は外国にルーツを持つ子どもたちの大切な日本語学習の場として確かな成果をあげていると実感できるようになってきました。

休まずやってくる子どもたちの成長ぶりは目を見張るものがあります。もちろん数日しか参加できない子どももいますが、どの子にとってもサマースクールは自分を受け入れてくれる安心できる場であり、また自分と同じように頑張っている仲間と出会うことができる場となっています。

今年は低年齢の子どもが多く、そのうえ日本語の習熟度に差があったため、マンツーマンで行う個別学習がたいへん効果的でした。全体学習では初日の自己紹介ゲームから始まり、歌や読み聞かせ、言葉のゲームと、いろいろな活動を通して仲間意識をはぐくみ、時には母語で教え合い、自分の持っている力を存分に発揮し個々の自信へとつなげることができました。

絵と文で書き上げた「将来の夢」は教室で撮った笑顔いっぱいの写真と共にアルバムとなり、8日間の思い出を詰めて大切に持ち帰ることができました。 (杜 美智)



今年で5年目となる「就職のための日本語講座」

日時：5月14日～7月9日(月曜日～金曜日 9:30～12:30) 場所：ヒューマンワークぴあ徳島
主催：公益社団法人徳島県労働者福祉協議会

今年は中国5名、フィリピン3名の方が120時間のこの講座に臨みました。日本語レベル、生活環境など様々でしたがこの2ヶ月間、受講生、講師が一丸となって取り組み、日々前進していった気がします。

講座の目的は？ 仕事にいかせる日本語の習得だけではなく、電話応対や名刺交換などのビジネスシーンでのマナーを身につけます。最初は日本のマナーや習慣に戸惑っていた受講生ですが、楽しみながら理解していきました。

内容は？ 「尋ねる・頼む・手順を説明する・計画を立てる」などの場面での会話表現、文法や語彙を学び、実際の状況を設定し、ロールプレイを行います。受講生は学んだことや知っている言葉を使って自分の力で伝えようとします。これが現実のコミュニケーションに近いものを体験できる場となります。

受講生のその後は？ 受講生8名のうち4名は現在開講中の「介護の日本語講座」を受講しています。日本語能力試験を目指している人もいます。

修了式で「わたしはここ徳島でがんばって仕事をしていきたい。」と強い思いを語った受講生がいました。家事や仕事をこなしながら、この講座でがんばっていた彼女たちの姿は自信にも満ち溢れていました。 (加村 匡子)



INFORMATION

◆会員数(2013年10月12日現在) 正会員数49名 協力会員数1名
 ◆入会随時受付中! 正会員…会の活動に参加し、ともに運営を行います。
 協力会員・団体…会の活動を支援する個人または団体

活動紹介

ブラッシュアップのために

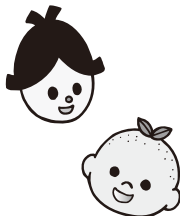
- ◇日本語指導勉強会
*毎月第2土曜日13:30~15:00
〈模擬授業と意見交換〉日本語に関心のある方ならどなたでも参加できます。
- ◇日本語指導部研修会
*毎月第3金曜日または土曜日
- ◇定例会 ◇特別研修会

日本語学習をサポートする交流活動

- ◇日本語サロン
*毎週月曜日10:30~12:00
とくしま国際戦略センター

JTMにほんご教室

- *毎週日曜日13:30~15:00
とくしま国際戦略センター



就職のための日本語講座

- *5月14日(火)~7月8日(月)

介護の日本語講座

- *9月3日(火)~10月31日(木)
ヒューマンわーくびあ徳島
主催 公益社団法人徳島県労働者福祉協議会

徳島県アパレル縫製工業組合日本語集合研修

- *9月5日(木)~10月1日(火)

日本語レッスン

- ◇プライベートレッスン・グループレッスン
入門から上級まで、会話や日本語試験対策などニーズにあった学習プランで教えます。
- ◇詳しくは事務局またはレッスン専用メール
jtmtokeu-lesson@mbk.nifty.com まで。

JTMとくしまのオリジナル教材紹介

Konnichiwa Tokushima

こんにちは とくしま

徳島で日本語を学ぶ人のために

本書は初級学習者向けの教材です。

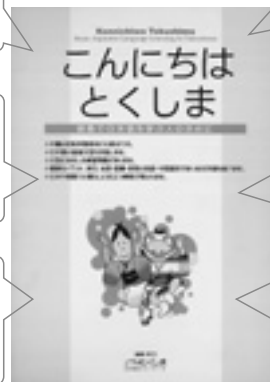
日本語の基礎文型を学習します。

文型に対応した練習問題があります。

イラストがたくさんあり、わかりやすいです。

日本や徳島の暮らしに役立つ情報が得られます。

会話と語彙、表現の英語・中国語訳があり、自習学習を助けます。



●ご購入、お問い合わせは…

- J T M とくしま事務局 または
- ✿ 紀伊国屋(そごう徳島店 8 F)
- ✿ 宮脇書店(クレメントプラザ 4 F)

ご支援をいただきました

□徳島中央ロータリークラブおよび
四国地区ロータリー財団委員会より
新地区補助金支援をいただきました

活動に対してご理解とご支援をいただいたことに感謝し、「誰もが人に喜ばれ、人の役に立ち、必要とされていると実感できる地域づくり」につながる日本語支援に取り組んでいきたいと思っております。

あ と が き

コスモスが咲き、虫の音が聞こえても、ずいぶん暑い日々が続きました。10月半ばになって、ようやく気持ちのよい季節になりました。

JTMでは、今年度いろいろな活動に加え、セミナーも多く、得るものも多かった前半期でした。「あわゆずぶれす」28号ができました。お読みになって、ご意見、ご感想をお寄せいただければ幸いです。

(山溝 十糸子)

発行/JTMとくしま日本語ネットワーク

発行責任者/兼松 文子

編集責任者/山溝十糸子

編集スタッフ/加村 匡子・玉置 房・辻 暁子・長町 順子
村松 幸子・杜 美智・安山 政子

印刷/徳島県教育印刷株

■JTMとくしま日本語ネットワーク

〒770-0942 徳島市昭和町3丁目35-1 わーくびあ徳島2階
公益社団法人 徳島県労働者福祉協議会内
TEL 088-625-8387 FAX 088-625-5113
E-mail jtmtokeu@nifty.com
URL http://homepage2.nifty.com/jtmtokeu/